



愛知工業大学
愛知工業大学名電高等学校
愛知工業大学名電中学校
愛知工業大学情報電子専門学校

令和元年秋季版

(令和元年 11月 15日)

学園全卓球部完全優勝！

今夏全国大会で



決めた！ インカレ日本一（大学男子卓球部）

大学・高校・中学の卓球日本一を決める今夏の全国大会（インカレ・インターハイ・全中）で、本学園の全卓球部（愛知工業大学男子卓球部、愛知工業大学女子卓球部、愛知工業大学名電高校卓球部、愛知工業大学名電中学校卓球部）がそろって優勝を成し遂げました。設置校全卓球部による完全優勝は、学園の歴史が始まって以来の快挙です。

大学男子卓球部は、中学・高校時代から互いに高め合ってきた仲間が出場。成長した学園の子供たちが、地元開催のインカレで他を圧倒する強さを見せました。

唯一の番狂わせだったのが、大学女子卓球部。優勝候補と目されない中、どこにも負けない気持ちの強さを最後まで失わず、喜びの涙にくれました。

高校卓球部は、がけっぷちのピンチからの神がかり的な逆転劇があり、堂々4年連続18回目の頂点に立ちました。

しんがりの中学卓球部は、大学・高校が次々と全国制覇を決めていく中、これまでにないプレッシャーを味わいました。昨年逃した全中王座を見事取り返し、完全優勝の最後のピースを埋めました。

■第 89 回全日本大学総合卓球選手権大会団体の部

大学男子卓球部 優勝（4年ぶり7回目）

大学女子卓球部 優勝（22年ぶり4回目）

■第 88 回全国高等学校卓球選手権大会

高校卓球部 学校対抗優勝（4年連続18回目）

個人戦シングルス準優勝、同ダブルス準優勝

■第 50 回全国中学校卓球大会

中学卓球部 団体優勝（2年ぶり12回目）

個人戦シングルス優勝・同準優勝



学園表彰で佐々木眞一・愛名会会長から祝福される監督選手ら



アベック優勝を成し遂げた大学男子卓球部・女子卓球部

卓球インカレ「第89回全日本大学総合卓球選手権大会団体の部」(7月4～7日・スカイホール豊田)で、大学男子卓球部と女子卓球部がアベック優勝を成し遂げました。同一校による男女そろっての優勝は、大会史上49年ぶり(1970年の専修大以来)です。

男子は4年ぶり7回目の優勝です。出場メンバーは松山祐季(3年)木造勇人(2年)高見真己(2年)田中佑汰(1年)。ジュニア時代から愛工大附属中学校(現・名電中学校)、名電高校で切磋琢磨してきた仲間で、全員が世界ジュニア卓球メダリストです。



「日本一」の胴上げに舞う神京夏主将



22年ぶりインカレ優勝を決めた瞬間(大学女子卓球部)

静香(3年)。仲間の声援に気持ちを奮い立たせながら戦い抜き、決勝では東洋大を3-0のストレートで下して念願の頂点に立ちました。

競技後の閉会式で、男子の高見、女子の石田の両選手が殊勲賞の表彰を受けました。

今大会の最大のヤマ場は、前年覇者の専修大との対戦になった準決勝。一番・高見が専修大エースの及川瑞基選手をフルセットの激闘の末に下して勢いに乗りました。終わってみれば、予選リーグの2試合、決勝トーナメントの4試合が、すべて3-0のストレート勝利。地元開催のインカレに最強布陣で臨み、並み居るライバルたちを圧倒しました。

一方、女子は実に22年ぶり、4回目の優勝です。近年は昨年まで5年連続でベスト8と、名門復活に向けて着実に力をつけてきました。出場選手は、石田葵(4年)船本さくら(4年)上田真実(3年)松本

インカレ卓球男女アベック優勝を成し遂げた陰に、「情報解析グループ」として部活動に参加する澤野弘明・情報科学科准教授らによる支援がありました。

澤野准教授らは主に情報解析ツールの開発を手掛けています。開発したシングルの打法分析アプリ「教卓」で、部員が対戦相手のサービスとレシーブの打法を入力。澤野准教授のビジュアル情報処理研究室がその統計情報を部員にフィードバックし、次の試合の対策に役立てています。

このほか情報解析グループでは、VRゴーグルを用いたフォーム解析ソフトや、自分の試技やプレーをすぐに確認できる遅延映像再生アプリなどを開発、提供。本学ならではの情報科学と部活の強力なタッグで、さらなる高みを目指します。



「教卓」のサービス入力画面

Vに貢献、
情報解析グループ

高校卓球部はインターハイ 4 連覇の偉業

第38回全国高等学校卓球選手権大会



4 年連続 18 回目の頂点に立った高校卓球部（写真はニッタクニュース提供）

8月14～20日、鹿児島アリーナで開かれた第88回全国高等学校卓球選手権大会で、高校卓球部が4年連続18回目の全国制覇を成し遂げました。個人戦でもシングルの篠塚大登（1年）、ダブルスの加山裕（3年）・曾根翔（2年）がそれぞれ準優勝しました。

学校対抗の決勝では、ライバル校の野田学園（山口県）をストレートで下しました。初戦、野田学園のエース・戸上隼輔選手と対戦した加山がいきなり2ゲームを落とし、第3ゲームも5-10と後がなくなってからの7点連取。インターハイ史に残る大逆転勝利を収め、4連覇へ一気に流れを引き寄せました。2番の曾根は「勝たなければ」という重圧の中、必死にポイントを重ねて勝利。3番ダブルスは、今大会ダブルス優勝の戸上選手・宮川昌大選手を相手に、決勝戦用に準備していた曾根・篠塚で対戦し、フルセットの末にチャンピオンチームを下しました。

学園卓球部完全優勝

中学卓球部は王座を奪還、通算12回目のV

中学卓球部はウカルちゃんアリーナ（滋賀県立体育館）で8月20～23日に開催された第50回全国中学校卓球大会で、2年ぶりに団体戦の王座を奪還しました。全中優勝は通算12回目です。さらに個人戦（シングルス）も、吉山僚一（3年）と鈴木颯（同）による名電同士討ち決勝戦を経て、吉山が優勝、鈴木が準優勝を飾りました。

団体戦決勝は、中学もライバル校・野田学園（山口）との戦いに。1番は、主将の鈴木が第1ゲームを奪われた後、3ゲーム連取で意地を見せました。1-1のタイで迎えたダブルスと4番（同時進行）で、いずれも3-0のストレート勝ちを収め、王座に再び咲きました。個人戦では、吉山が序盤の劣勢を挽回して初優勝。名電のワンツーフィニッシュという最高の形で大会を終ることができました。



プレッシャーをはねのけ王座を奪還した中学卓球部（写真はニッタクニュース提供）

監督たちの喜びの声

学園卓球部完全優勝

鬼頭明・大学卓球部総監督※大学女子卓球部について 選手8人全員がベンチ入りし、一丸になって戦いました。男子と違って接戦、逆転の連続でした。毎年3位に入ることを目標にしながらベスト8の壁を超えることができなかったので、今年から「あわよくば優勝」の目標を付け加えました。いつもより練習の内容を変え、量を増やし、選手たちは本当によくついてきてくれました。日本一の取り組みをしたので、どこでもいい勝負をする自信がありました。練習への取り組みが日本一。大会への準備が日本一。チームワークが日本一。そして地元での大応援団が日本一。けっして日本一が偶然でなかったと思っています。彼女たちは男子と比べて実力も実績もありません。インターハイでシングルのベスト16に入った子は一人もいませんが、男子以上に強くなりたい、勝ちたいという気持ちを、一緒にいてすごく感じました。なんとか彼女たちの力になれないか、勝たせてあげたい、強くしてやりたい。そういう気持ちが僕の情熱に火をつけました。彼女たちは、チャレンジし、努力し、工夫すれば日本一になれるということを、全国の大会で示し、多くの人に勇気と希望、感動を与えたと思います。チャレンジすること、努力すること、工夫することの大切さと楽しさを、僕自身が教えられた大会でした。

森本耕平・大学男子卓球部監督 主将の神京夏(4年)をはじめ、裏方に徹した選手たちと一丸になって勝ち取った優勝です。出場しない選手たちに支えられ、最高の仕上がりで大会を迎えられたのが一番の勝因です。彼らに対して「おめでとう、ありがとう」という思いです。地元開催でもあり、たくさんのOB・OG、学園関係者の方々、そして名電の中学生、高校生が連日応援に駆け付けてくれました。「大学の男子は優勝するよね」という声をたくさんいただきましたが、勝つだろうと思われる勝負をちゃんと勝つのは、なかなか簡単なことではありませんでした。私が思っている以上に、選手のみならず勝たなければいけないという重圧が大きかったのではと思います。その重圧を見事にはねのけ、しかも誰も負けずにオール3-0で優勝というおまけまでつけてくれました。インカレが終わってからも、皆様からいただくお祝いの声で、「ああ俺たちは優勝したんだ」と、勝つことの喜びを再確認でき、「また頑張ろう」という明日へのモチベーションにつながっています。大学卓球部の試合はこれからも続いています。やはりチームとしては「インカレ優勝」、これは絶対にあります。そして個人のレベルアップをはかり、チーム力をさらに向上させていきます。今後ともどうか応援をよろしくお願いします。

今枝一郎・高校卓球部監督 大会前、日本一の愛工大が連日練習に来てくれ、大変充実した準備ができました。「大学が優勝したんだから」と、地元開催だった昨年よりも重圧を感じながら迎えた大会でしたが、そんな私のプレッシャーを知ってか知らずか、選手たちは目いっぱい戦ってくれました。

1年生がベンチ入りに3人ということでも緊張感がありましたが、選手たちは力強くプレーし、順調に決勝戦まで進むことができました。1番の加山裕は、相手が昨年と今年のインターハイ優勝選手で、1セット目5-11、2セット目3-11、3セット目5-10で敗けている状況から、うそのような逆転勝ちをしました。よくあきらめなかったと本当に感心します。2番の曾根翔も、加山がうそのような勝ち方をしてくるものですから、必要以上にプレッシャーを受け、がちがちで自分の力が出せない状況で勝利をつかみ、チームをぐっと優勝に引き寄せました。ダブルスは、準決勝まで加山裕・曾根翔で出場しましたが、決勝戦は全国大会で初めての曾根翔・篠塚大登で臨みました。1年生の篠塚は決勝戦でも動じず、落ち着いたプレーで勝利に貢献しました。来年、再来年とさらに優勝記録を伸ばし、国内だけでなく国外でも活躍して、名電の名前が響き渡るよう今後一層頑張っていきたいと思います。

真田浩二・中学卓球部監督 昨年度、夏と春で全国大会のタイトルを失い、今年の夏は何が何でもタイトル奪還を誓いました。しかし、思春期の中学生を自分の理想通りに運ぶことは困難でした。プレッシャーのかかる場面を想定し、普段のプレーや、勝負するプレーを実行する選手を選び、オーダーに名前を書きます。大会2週間前に迷いが生じ、春から想定して練習を重ねたダブルスのペアリングを変更しました。選手と意思疎通が取れていなかったことでチームの輪も乱れ、私の心も乱れました。出発1週間前のミーティングで選手1人1人の気持ちを聞き、私の考えを伝え、皆が納得したか分かりませんが、戦う覚悟はその場で作れたと思います。結果的に、直前に変更したダブルスが大きな働きをしました。ダブルスの2年生中村煌和は、準決勝・決勝の大舞台上、接戦になればなるほど、獲物を狩るような目つきで相手に襲いかかった光景が今でも浮かびます。学園初の完全優勝がかかった状況で、多くの方々に気持ちの面で助けていただき、「言葉」が人を突き動かす原動力と、あらためて実感しました。私も選手にある言葉を言い続けました。「いけるで！」です。どんなに苦しい状況でも、プラスの気持ちになることが、打開する一番の方法です。皆に感動を与えた選手に心から感謝しています。



大村秀章愛知県知事に優勝報告した学園の卓球部

全日学でもダブルス優勝、シングルス準優勝

10月24～27日に島津アリーナ（京都府立体育館）で開催された第86回全日本大学総合卓球選手権大会個人の部（略称・全日学）で、大学卓球部は男子ダブルスで木造勇人／田中佑汰が優勝するなど、好成績を収めました。

男子ダブルスは、決勝で木造／田中の2年生・1年生ペアが、明治大の龍崎東寅選手／沼村齊弥選手と対戦。第1ゲームのジュースを取って先制し、3－1で初優勝を飾りました。本学のこの種目での優勝は、平成24年度の森本耕平（現監督）／吉村真晴以来、7年ぶりとなります。宮本春樹／田原彰悟もランキング4位となりました。

このほか、男子シングルスで木造が準優勝、松山祐季が3位、高見真己が6位、田中が10位。女子シングルスで松本静香が12位と、それぞれランクインしました。

◎東海学生はシングルス1～3位独占

一方、本学は6月15～16日に一宮市総合体育館で開かれた東海学生卓球選手権大会で、男子シングルス1～3位を独占するなど活躍しました。

男子シングルスは松山が優勝し、田中が準優勝、宮本と高見が3位。同ダブルスは松山／高見が優勝、神京夏／田中侑人と宮本／田原が3位の成績でした。女子も、シングルスで松本が準優勝、石田葵と上田真実が3位、ダブルスで松本／上田が準優勝、江戸絢音／中村莉子が3位入賞しました。



7年ぶりに本学に全日学ダブルス優勝をもたらした木造⑤／田中ペア（写真はニッタクニュース提供）

日本卓球リーグで年間3位、ファイナル4出場へ

大学男子卓球部は令和元年度日本卓球リーグで年間3位の成績を収めました。12月に徳島市で開かれるプレーオフ（ファイナル4）に出場します。

6月19日から23日まで豊田市のスカイホール豊田で開催された2019年度前期日本卓球リーグ豊田大会に出場した大学男子卓球部は、4勝3敗・4位の成績を収め、ジャンプアップチーム賞の表彰を受けました。大会では大学卓球部OBも活躍し、藤村友也選手（日鉄物流ブレイザーズ）が優秀ペア賞、吉村和弘選手（東京アート）が新人賞をそれぞれ獲得しました。女子2部にスポット出場した大学女子卓球部は4勝3敗・4位の成績でした。大会に先立って6月2日、八草キャンパスで昨年前期優勝の強豪チーム・リコーを迎え、同リーグ戦のホームマッチが行われました。本学の選手たちは三番のダブルスを落としたのみで、3－1で勝利を収めました。

後期リーグ秋田大会（10月29日～11月3日・秋田市立体育館）は5勝2敗の成績で2位となりました。松山祐季／高見真己が優秀ペア賞を獲得しました。秋田大会に先立って10月14日には八草キャンパスで日鉄物流ブレイザーズを迎えてホームマッチが行われました。OBの藤村選手も対戦相手でも出場した試合は、3－1で本学が勝利しました。



優秀ペア賞の松山⑤／高見



曾根⑤／篠塚組（ITTF 提供）

ITTFの大会などで活躍 設置校の卓球選手たち

中学卓球部では11月8～10日、山口県の維新大晃アリーナで開かれた卓球の全日本選手権（カデットの部）で中村煌和／菅沼翔太がダブルス初優勝（中村はダブルス2連覇）したほか、13歳以下シングルスで坂井雄飛が優勝、14歳以下シングルスで中村煌和が優勝しました。

このほか設置校の選手たちは、今季も次のITTF（国際卓球連盟）の大会で優秀な成績を収めました。

【5月】◎チャレンジタイオープン アンダー21 シングルス準優勝・高見真己（大学）、シングルス3位・田中佑汰（大学）【6月】◎ジュニアサーキット中国オープン ジュニアシングルス準優勝・篠塚大登（高校）、同3位・横谷晟（高校） ジュニア団体3位・鈴木颯と吉山僚一（中学）、カデットシングルス3位・吉山僚一（中学）【9月】◎アジアジュニア&カデット卓球選手権大会 ジュニアダブルス準優勝・篠塚大登／曾根翔（高校）、ジュニアシングルス3位・篠塚大登（高校） ◎ジュニアサーキットチャイニーズタイペイオープン ジュニアダブルス優勝・吉山僚一（中学）／加山裕（高校）、同準優勝・鈴木颯（中学）／濱田一輝（高校）、ジュニアシングルス2位・吉山僚一（中学）、同3位・加山裕と濱田一輝（高校）、ジュニア団体3位・濱田一輝（高校）と鈴木颯（中学）、カデットシングルス2位・鈴木颯（中学）【11月】チャレンジベラルーシオープン ダブルス準優勝 曾根翔／篠塚大登（高校）

大学硬式野球部

全日本大学野球選手権で27年ぶりの勝利



快打を放つ田中怜央那内野手



初戦を突破した愛工大ナイン

6月の第68回全日本大学野球選手権大会に愛知代表として23年ぶり10回目の出場を果たした大学硬式野球部は、初戦（10日・東京ドーム）で南東北代表の東日本国際大と対戦。7-3で下し、1992年の第41回大会以来27年ぶりとなる選手権1勝を手に入れました。

「先制すると乗っていける」（平井光親監督）というチームの本領を発揮し、11安打で7点と打線がつながりました。2回2死二塁、田中怜央那（2年）の2ランで先制。さらに4回、中井雄輝（3年）と田中のタイムリーで2点を追加し、6回にも2死満塁から後藤晃成（1年）の2点タイムリーでリードを広げました。投げては先発の中村光汰（4年）が5回までを抑えて流れを作り、新村将斗（3年）の好救援などで相手の反撃を封じました。

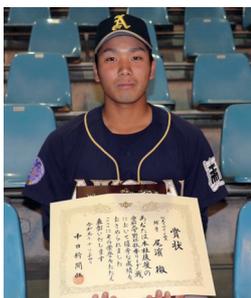
2回戦（12日・東京ドーム）は、本大会準優勝校となった京滋代表の佛教大と対戦。9安打を放ちながらも1得点のみとペースをつかめず、序盤の失策もあって1-4で敗れました。念願の神宮球場で戦う夢（準々決勝進出）はかないませんでした。応援の学園関係者から選手たちに惜しみない拍手が送られました。

秋季リーグ、惜しくも春秋連覇を逃す



愛知大学野球連盟の秋季リーグ戦1部リーグで、大学硬式野球部は最終週まで首位争いを繰り広げましたが、惜しくも春秋連覇を逃しました。

6月の全日本選手権での経験を活かし、本学は守備の精度を高めて秋季リーグ戦に突入しました。好スタートを切り、中京大などと首位を争う展開になりましたが、結果は6勝5敗・勝点3で3位の成績でした。



秋季リーグ戦の閉会式は10月24日、パロマ瑞穂球場で開かれ、尾濱徹捕手（3年）＝写真⑤＝が春に続いてベストナインに選ばれました。



壮行会で熱い励まし

大会に先立って6月4日、名古屋市内のホテルに関係者約220人が参加して「2019年愛知大学野球春季リーグ優勝祝賀会」

「第68回全日本大学野球選手権大会出場壮行会」が開催されました。

後藤泰之理事長・学長が、挨拶で「しっかり練習した成果が失策の少なさに表れている。愛知大学野球連盟の代表として誇りと自信を持ち、優勝を目指してほしい」と選手たちを激励しました。続いて愛知大学野球連盟の新井野洋一理事長が「記録と共に勝ち負け以上の記憶を勝ち取り、真の勝利者となるよう」と祝辞を述べ、市川晃大主将に激励金を手渡しました。この後、クラブ表彰で登壇した平井光親監督、服部洋児部長、市川主将に対して学園と学校法人名古屋電気学園愛名会、大学同窓会瑞若会からお祝いが贈られ、平井監督、市川主将が力強く決意表明しました。



激励する後藤泰之理事長・学長



祝辞を述べる新井野洋一連盟理事長



故後藤淳総長の墓前で健闘を誓う硬式野球部

中学フェンシング部が全中優勝



2年ぶり3度目の優勝を飾った中学フェンシング部

7月20～22日、東京の駒沢オリンピック公園屋内球技場で行われた全国中学生フェンシング選手権大会で、中学フェンシング部が2年ぶり3度目の男子団体戦優勝を飾りました。学園は部に対して学園表彰を行い、快挙をお祝いしました。

最終ゲームにもつれ込む苦しい試合ばかりでしたが、レギュラー3人中、2人が1年生という若いチームが、チームワークの良さで逆境を乗り越え、栄冠を手に入れました。

3年生の弓長昇主は2年前の優勝メンバーで、今回優勝するための準備を続けてきました。1年生の長谷川力玖と林川琉偉は、ともに全国小学校フェンシング選手権で優勝を経験しており、互いに切磋琢磨することで、優勝に貢献する力を各々身につけてきました。

前日まで行われた個人戦は、最高ベスト32の成績で敗退し、必勝を期して団体戦に臨みました。個性的なメンバーが各々のポジションで役割を果たして接戦を勝ち抜き、決勝戦では個人戦の優勝者を擁する岐阜県のはしまモアフェンシングクラブを下して頂点に返り咲きました。

高校フェンシング部は全種目入賞

7月26～30日、鹿児島県霧島市の牧園アリーナで開催された全国高校総体フェンシング競技で、高校フェンシング部の加藤響（3年）が男子サーブル準優勝を飾りました。同部は、このほか男子学校対抗で2年連続の3位、エペで古橋諒樹（3年）が5位、フルーレで太田拓輝（2年）が7位と、全種目で入賞を果たしました。

17歳以下日本代表の加藤は、予選から相手を大きくリードする試合ばかり。決勝ではともに日本代表で戦ってきた選手を迫る展開になり、最後までペースを崩すことができず5点差で準優勝となりました。

学校対抗は、1回戦で個人戦優勝者を擁する龍谷大平安高校と当たり、2回戦も全国選抜3位の地元鹿児島高校が相手という厳しいトーナメントとなりました。しかし総合力で優って1、2回戦を競り勝つと、その勢いのまま3回戦、準々決勝を危なげなく勝利。準決勝の相手は全国選抜優勝の慶應義塾高校を倒した宇都宮南高校との対戦となり、チームカウント4-4、個人スコア4-4と、一本を取った方が勝ちとなる展開で惜しくも敗れました。富田弘樹監督は「1、2年生だけの若いチームなので、春の全国選抜、夏のインターハイと優勝を狙いに行く」と話しています。



全種目入賞を果たした高校フェンシング部

フリースタイルモーグル・オーストラリア選手権で柳本選手が3位入賞



3位入賞した柳本選手（右端）

8月25～30日、オーストラリアのペリシャースキーリゾートで開催されたフリースタイルモーグルのオーストラリア選手権で、大学競技スキー部の柳本理乃選手（経営学科1年）が3位に入賞しました。

今回の選手権には、オーストラリアを含め世界7か国から42人が参加しました。柳本選手は事前合宿からの好調をキープし、第1戦目の予選から好スコアで上位に位置し、決勝でも安定した滑りで3位入賞、第2戦目も5位入賞しました。

今季のワールドカップメンバーに選ばれている選手も参加する中での価値ある表彰台となり、11月からの本シーズンへ向けて幸先の良いスタートとなりました。なお、同じく参加していた伊原遥香選手（経営学科3年）は、12位（1戦目）と11位（2戦目）でした。

全日本大学駅伝に3年連続18回目の出場



1区・小林宏輔



2区・植松達也



3区・児玉勘太

第51回全日本大学駅伝対校選手権大会が11月3日、熱田神宮から伊勢神宮までの8区間106.8^キで行われ、大学陸上競技部は東海地区代表として3年連続18回目の出場をしました。

1区・小林宏輔、2区・植松達也、3区・児玉勘太、4区・服部大暉、5区・鈴木高虎、6区・三浦真和、7区・大野誠士、8区・中村正明の各走者が、前回19位からの順位アップを目指しましたが、最終区間の8区で繰り上げスタートとなり、21位でのゴールでした。

奥野佳宏監督は「タイムは前回大会を上回り、チーム全体の底上げや走力アップ、安定感は出ていることを証明できる結果でした。今後、全国との差を詰める取り組みをどう進化させていくかが課題になります。次は、12月に開催される東海学生駅伝、次年度の出雲大学選抜駅伝出場権をかけて準備を進めていきたいと考えています。当日早朝からスタート地点をはじめ、沿道や中継所、ゴールまで応援に駆けつけてくださった大学関係者の皆様、保護者、卒業生、またテレビ観戦していただけた方々の声援が選手の後押しとなったことに対して厚く感謝を申し上げます」と話しています。



出雲駅伝（10・14）にも3年ぶり11回目

大学陸上競技部・奥野監督コメント

大学三大駅伝の幕開けとなる第31回出雲全日本大学選抜駅伝が、全国の神々が集まる出雲で「神在月」の14日に開催された。台風19号が接近し開催や現地入りが危ぶまれる中、無事にスタートラインに立つことができた。

出雲大社正面鳥居前を出発して、各地の予選を勝ちぬいた大学や各地区から選抜された選手、アメリカアイビーリーグ選抜の21チームが、6区間45.1^キ、出雲ドームを目指し戦った。過去最高順位と東海地区成績枠確保を目標としてスタート。前半の出遅れを後半区間で取り戻し、少しずつ順位を上げ、17位でゴールした。目標達成とはなかったが、走った選手からは、「沿道の声援が力になった。来年も出雲路に戻るために精進する」「課題の多く残る駅伝でしたが、来年必ずリベンジしたい」「初めて走った出雲駅伝でしたが地元や運営スタッフの方々に支えていただき感謝しています」等の声が聞け、次に向けた課題も発見された。支えてくださる方々への思い、競技力向上への意欲が増した大会となったと感じている。



高校吹奏楽部が全日本銀賞 定期演奏会（1月8日センチュリーホール）で感動再び

高校吹奏楽部は、10月20日に名古屋市の名古屋国際会議場センチュリーホールで開かれた全日本吹奏楽コンクールに東海支部代表として高校部門全国最多となる42回目の出場を果たし、銀賞に輝きました。自由曲は「ブリュッセル・レクイエム」を選び、これまで活動を支えてくれた人々に感謝の心を込めて難曲を歌い上げました。表彰式で、顧問の伊藤宏樹教諭が全国大会出場15回永年指揮者賞をただ一人受賞し、表彰を受けました。

同部は、中部日本吹奏楽コンクールでも1位の文部科学大臣賞を受賞しました。

一方、同部の今夏のサマーコンサートは3会場3公演でのお披露目となり、7月12日に日進市民会館、13日に名古屋文理大学文化フォーラム（稲沢市民会館）、16日に名古屋国際会議場センチュリーホールで、それぞれ開かれました。各会場ともプログラムは3部構成で、伊藤教諭らの指揮の下、200人の部員が織りなす華やかな演奏が吹奏楽ファンを魅了しました。

第1部は『『あんたがたどこさ』の主題による幻想曲』など、2019年度全日本吹奏楽コンクール課題曲の4曲。第2部の中の「祝典のための音楽」では、顧問の遠山翔大先生が指揮をとりました。

バラエティーに富んだ内容の第3部では、第50回定期演奏会記念委嘱作品「ゴールデン・ジュビレーション」に続き、英国の伝説のロックバンド・クイーンの名曲メドレーなどを客席も巻き込んで演奏しました。恒例の1年生部員が演出する楽曲は、今夏は「アラジン・メドレー」となり、アラジンやジーニーら登場人物が繰り広げる手作りの寸劇とともに、満席の会場を沸かせました。



吹奏楽ファンを魅了したサマーコンサート

全国高校将棋選手権で男子団体準優勝（男子として過去最高成績）



男子団体戦で創部以来最高の成績を収めた将棋部

佐賀県で7月30～31日に開催された第55回全国高等学校将棋選手権大会（2019 さが総文・将棋部門）で、名電高校将棋部が男子団体戦準優勝の成績を収めました。男子として2年ぶり5回目となる団体戦出場で、準優勝は過去最高の成績です。

大会には、大将を務めた吉田佑吏（3年）、副将の亀山凌（2年）、三将の瀬野泰平（3年）が選手として出場しました。

3人は、麻布高（東京）と対戦した予選3回戦で苦戦の末に大逆転勝利を収め、決勝トーナメント進出を決めました。最大のヤマ場は、最有力優勝候補と目される岩手の岩手高（2年連続準優勝、10年間で3回優勝）を倒した準々決勝。吉田は、いい形勢ながら逆転負け。瀬野は岩手高の三将（中学名人・王将）に完封完勝。亀山は、なんと300手を超す大熱戦の末勝

利を収め、場内を騒然とさせました。

準決勝の県立浦和高（埼玉）戦では、吉田が準決勝の大将戦とは思えないぐらいの大差の形勢で勝利。決勝は予選1位の甲南高（兵庫）と対戦し、瀬野が完勝するも1-2で敗れました。

同大会団体戦で、名電高は女子が第48回、第49回で連続優勝しており、名電としての入賞は、女子の第50回に続いて5年ぶり6回目となります。「本当によく戦ってくれて、心から感動しました」と顧問の原野照久教諭にねぎらわれた選手たちは「決勝では勝てた局面もあり心残りですが、部員・両親・顧問の力があつたからの準優勝。生涯の宝です」（吉田）「将棋の全国大会に出場したくて名電を選んだ。来年もこの舞台に、さらに強くなって戻ってきたい」（亀山）「最後の大会で最高の成績を残せたことは僕の人生にとって大きな自信になりました」（瀬野）と話しています。

後藤杯卓球 松山らが連覇

第48回後藤杯卓球選手権大会（名古屋オープン）は9月14～16日の3日間、愛知県体育館で開かれました。約650選手が参加し、ピンポン外交に尽力した後藤鉦二先生、昨年逝去された学園総長・後藤淳先生の遺影が見守る下で熱戦を繰り広げました。



男子ジュニアで2連覇した小林広夢ら

学園設置校の選手たちは、男子シングルスで大学の松山祐季が2連覇し、宮本春樹が準優勝、高校の加山裕が3位入賞しました。男子ジュニアでも高校の小林広夢が2連覇し、岡野俊介が準優勝、白山遼が3位入賞しました。

男子ダブルスでも大学の松山・高見真己が2連覇し、木造勇人・田中佑汰が準優勝、宮本春樹・田原彰悟と神京夏・田中佑人が3位入賞しました。

閉会式で後藤泰之・愛知県卓球協会会長が優勝した選手らに後藤杯などを手渡し「次の大会でも優勝を目指してください」と激励しました。



男子シングルスで2連覇した松山祐季ら



練習の成果を存分に聴かせた定期演奏会

愛知工業大学管弦楽団第22回定期演奏会

大学管弦楽団の第22回定期演奏会が10月13日、名古屋市青少年文化センターアートピアホールで開かれました。

東海地方を中心に多くの演奏団体の指導に当たる中村暢宏氏を今年も指揮者に迎えました。プログラムは、グリンカの「幻想的ワルツ」、ボロディンの「交響曲第3番」、チャイコフスキーの「交響曲第5番」。学生たちにとって難曲ですが、全員で努力を重ねて本番の日を迎えました。コンサートマスターを務める青木秀尚さんら学生たちの生気に満ちた演奏に、客席から

盛んな拍手が送られました。

大学管弦楽団は昭和58年に同好会からスタートし、東海学生オーケストラ連盟に所属する他大学の賛助出演を得て演奏会活動を続けています。新たに練習熱心な1年生を迎え、より一層レベルアップした演奏を目指しています。

名電出身の親方・力士を励ます会

「名電出身の親方・力士を励ます会」が7月14日夜、若松親方（元朝乃若）、山分親方（元武雄山）、三段目力士として名古屋場所に臨んだ駒木龍（木瀬部屋）を迎えて名古屋市内のホテルで開かれました。

「励ます会」は毎年名古屋場所中日に開かれています。インターハイに出場する高校相撲部の主将に親方から激励賞が贈られた後、それぞれの近況報告がありました。



活躍を誓う駒木龍



近況報告する若松親方と山分親方

名古屋場所担当の若松親方は「朝乃山が場所前に白鵬のところに出稽古に行つてKOされましたが、行った気持ちが素晴らしい」と期待の星の意気込みを称えました。九州場所担当の山分親方は「日本人横綱やニューヒーローの誕生を願って、私たちも指導をしっかりしていこうと思います」と述べました。3勝1敗の成績で名古屋場所を折り返した駒木龍は「12年目となり、今場所の対戦相手はみんな一回り下ぐらい。若い子に負けないように頑張ります」と力強く誓いました。

全日本学生フォーミュラ大会で2年連続全完走、過去最高の総合19位を獲得



後藤泰之学長に受賞報告

8月27～31日に静岡県小笠山運動公園（エコパ）で開催された第17回全日本学生フォーミュラ大会で、大学フォーミュラ研究会が全種目を完走して2年連続となる日本自動車工業会会長賞を受賞しました。目標20位以内を掲げて

大会に臨み、過去最高となる総合19位を獲得しました。



愛知県学生ゴルフ選手権で準優勝と3位

8月19、20日、笹戸カントリークラブで開催された「2019 第23回 コカ・コーラボトラーズジャパン杯争奪 愛知県学生ゴルフ選手権競技」に、大学ゴルフ部の14人が出場しました。2日間36ホールストロークプレーで競技の結果、2016、2017年覇者の佐野琢朗（経営学科4年）が71・74の145ストロークで準優勝、兼松泰良（経営学科1年）が74・73の147ストロークで3位に入りました＝写真⑤。

足立一樹は日本学生ゴルフ選手権競技に出場

2019年度（第49回）中部学生ゴルフ選手権競技が8月8、9日に岐阜関カントリー倶楽部（東コース）で行われ、大学ゴルフ部の足立一樹（経営学部1年）＝写真⑥＝が参加96人のうち13位に入賞し、2019年度（第73回）日本学生ゴルフ選手権競技へ進みました。同選手権競技は8月27～30日、小野グランドカントリークラブ（NEWコース）で開かれ、結果は65位タイと、残念ながら上位進出はなりませんでした。

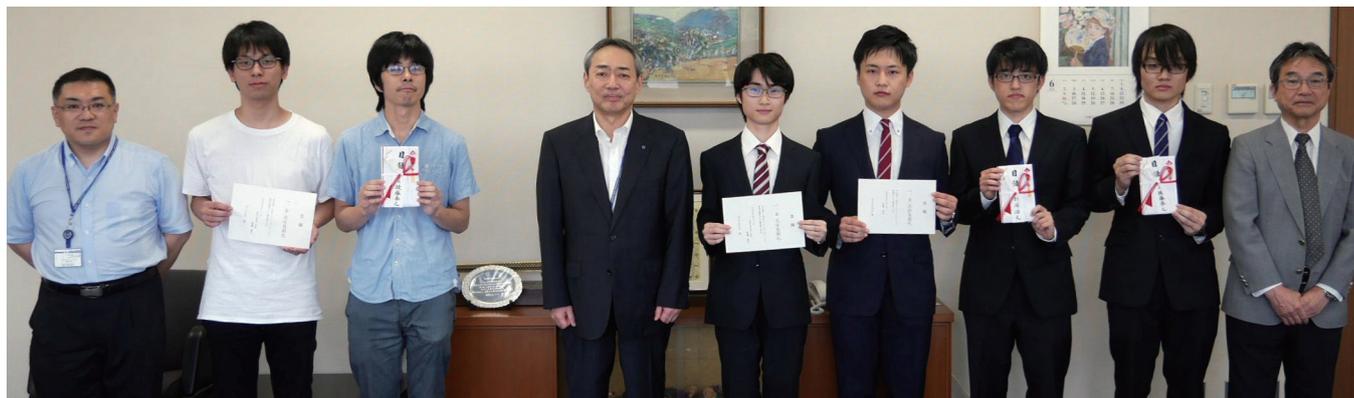


大学ライフル射撃部の成瀬あおいが東海ブロックの3位に

大学ライフル射撃部の成瀬あおい（応用化学科1年）＝写真⑦＝が、「国民体育大会第40回東海ブロック大会ライフル射撃競技会 兼 第74回国民体育大会東海地区予選会 兼 2019年度東海ライフル射撃競技選手権大会」（8月17～18日・三重県営ライフル射撃場）に出場し、AR60W（エアライフル立射60発競技）で3位の成績を収めました。同大会翌日には豊田市の愛知県総合射撃場で開催された「第37回中部学生スポーツ射撃伏射大会」「第40回中部学生スポーツ射撃新人記録会」に出場し、AR60Wで優勝したほか、ARP60MW（エアライフル男女伏射60発競技）で準優勝の成績を収めました。

学生チャレンジプロジェクト特別支援金 本年度は3つのプロジェクトを支援

ものづくりに挑戦する学生たちを支援する学生チャレンジプロジェクト特別支援金として、本年度は充電式単三電池が動力源の次世代エネルギーカーに取り組むAITEPのプロジェクトと、ロケット研究会の宇宙機開発プロジェクト、ハイブリッドロケットプロジェクトの計3プロジェクトに対し、各100万円が贈られました。贈呈式は7月22日に八草キャンパス本部棟で行われ、後藤学長がAITEPのプロジェクト代表の白倉稜大さん（電気学科3年）とロケット研究会の両プロジェクト代表の小嶋一路さん（機械学科3年）に目録を手渡しました。



大学4クラブ、中高12クラブをクラブ表彰

学園は7月～11月にかけて、全国大会に出場の大学4クラブ、中高12クラブに対してクラブ表彰を行いました。後藤泰之理事長が「愛知県代表、名電代表という気持ちを持って試合に臨んでください」などと各部の顧問、選手らを激励し、愛名会、高校PTA、高校同窓会からもお祝いが贈られました。表彰されたクラブと出場大会は次の通りです。

■ 7月11日の表彰

▼高校卓球部（令和元年度全国高等学校総合体育大会卓球競技）

▼高校フェンシング部（令和元年度全国高等学校総合体育大会フェンシング競技）

▼高校相撲部（令和元年度全国高等学校総合体育大会相撲競技）

▼高校ウェイトリフティング部（令和元年度全国高等学校総合体育大会ウェイトリフティング競技）

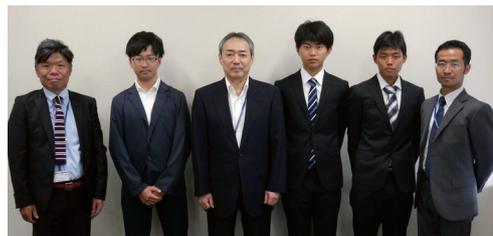
▼高校バレーボール部（令和元年度全国高等学校総合体育大会バレーボール競技）

▼高校チアリーダー部（JAPAN CUP 2019 チアリーダー部日本選手権大会）

▼高校将棋部（第43回全国高等学校総合文化祭将棋部門）

▼高校競技かるた部（第43回全国高等学校総合文化祭小倉百人一首かるた部門）

▼中学フェンシング部（第5回全国中学生フェンシング選手権大会）



■ 7月25日の表彰

▼大学ゴルフ部（第56回全国大学ゴルフ対抗戦）

▼大学陸上競技部（秩父宮賜杯全日本大学駅伝対校選手権大会）

■ 10月3日の表彰

▼大学男子卓球部・女子卓球部（第89回全日本大学総合卓球選手権大会団体の部）

▼大学陸上競技部（第31回出雲全日本大学選抜駅伝競走）



■ 10月4日の表彰

▼高校水泳競技部（令和元年度全国高等学校総合体育大会水泳競技）

▼高校吹奏楽部（第67回全日本吹奏楽コンクール）

▼中学卓球部（第50回全国中学校卓球大会）

■ 11月5日の表彰

▼大学ライフル射撃部（全日本学生スポーツ射撃選手権大会 第32回女子総合）

